



青木 有理子(金工作家)

いつか忘れてしまうものを、
思い出すための「鍵」

ハリネズミ、カエル、ヒトデ、セミなど、青木さんの作品には、多くの生き物が登場する。

「記憶つて、いつかなくなつてしまふでしよう。私は、小さい頃から、なんだ風景を思い出させてくれる。

「私がとつて生き物は、見たどたんに、一気に記憶を思い出させてくれるもの。忘却の封印を解く鍵なんですね」



Yuriko Aoki

高岡 Style

金工・漆工をはじめとするものづくりのまち高岡で、近年、工房を構える若いクリエイターたちが増えている。

このまちに市外から訪れ、自らのものづくりを追求するクリエイターたちの個性あふれる仕事場を訪ねた。

高岡クラフトコンペに出品。「生

活者が選ぶクラフト賞」を受賞し、株式会社能作から「ハリネズミ」として商品化された。それをきっかけにその後、高岡を拠点に活動しつづけている。受け継ぐものを、守る

「これから金工作家としてやつていくんだと、自分にも、周囲にも宣

ましとして仕事がしやすいからだけではない。受け継ぐものを、守る人々がいるからだ。父の転勤のたびに、一からスタートしていた青木さんを、高岡は長い時の流れのなか

で、やさしく受け止めてくれる。

「だから、高岡が好きなんです。私は、ずっと『地元』がなかったけど、ここを『地元』にしたいと思いました

ふんわりとした語りのなかに、高岡への強い思いが漂う。

「これからも、金属と向き合い続けたい」と言う青木さんは、今、作家として新しい挑戦を始めている。



(上)ハリネズミ
(下)睡蝶～おしじみ～(香炉)
※工芸都市高岡クラフトコンペティションは、1986年より開催している全国公募展

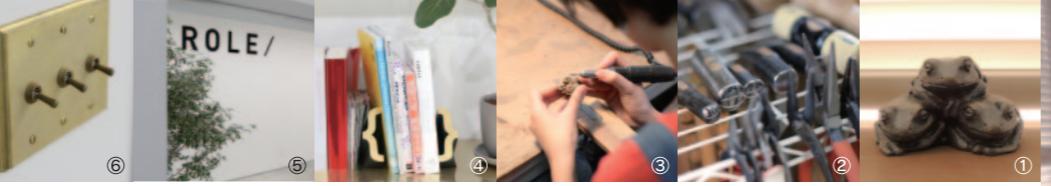
次世代クリエイター工房開設支援事業

高岡市では、クリエイティブ産業分野に従事するクリエイター（工芸家、工業デザイナーなど）の自立支援・活動支援として、市内の空き家や空き店舗などを活用した工房の開設を支援する事業を行っている。

紹介した3人のうち、羽田純さんが当事業の支援を受けて工房を開設した。

事業の詳細は、高岡市のホームページを参照。

[問]高岡市産業企画課 TEL.0766-20-1394



羽田 純

大阪府出身。秋田公立美術工芸短期大学、富山大学高岡短期大学専攻科修了。富山大学芸術文化学部が運営する「芸文ギャラリー」のキュレーションを担当。2015年、クリエイティブ・スタジオ『ROLE(ロール)』を立ち上げる。TOYAMA ADCグランプリ、とやまクリエーター大賞、富山県デザイン展大賞など

<http://haneda-jun.net>

④羽田さんの作品「カッコブックスタンド」
⑤事務所名が入った、入り口横のガラス面
⑥铸造メーカーの二上のスイッチ

Jun Haneda

青木 有理子

富山県出身。秋田公立美術工芸短期大学専攻科修了。高岡市伝統工芸産業技術者養成スクールにて鋳造・彫金を学ぶ。金沢卯辰山工芸工房を経て、高岡市金屋町金属工芸工房かんかに参加。2012年、独立。2015年、「The Wonder 500」(経済産業省)にコバンガエルが認定される。<http://aokiyuriko.com>

①青木さんの作品「コバンガエル」
②デスク脇に並ぶ工具たち
③作品の仕上げ作業をする青木さん



あいの風とやま鉄道 開業記念品



シューズブランドのポスター

菅を使った新しい商品
(高岡市デザイン・工芸センターと共同開発)

Yousuke Oosuga

「美しい仕事、かつこいい仕事ではなく、正しい仕事がしたい」
そう語る羽田さんは、大学入学をきっかけに高岡で暮らし、ギヤラリーのキュレーターを経て、高岡に新しいオフィスを開設した。

「クリエイターにとってオフィスは、今の自分の考え方を示すものなんです」
入ると白い空間が続く。基本をフレームに、できるだけ何もしないで、テーブルやスイッチなどのアイデムにこだわり、緊張感のある空間をつくつた。そこに、「使い勝手」という要素はない。

「ROLE」というネーミングには、目の前にある「役割」と向かい合おうという思いをこめている。役割に伴い、羽田さんの考えは変わっていく。そして、オフィス空間もまた、変わり続けるのだろう。

羽田 純(デザイナー)

大菅 洋介(建築家)

「古い家」という高岡の贊沢

大菅さんは、設計者として解体からデザイン、施工までを行う「解体設計」を実践している。

「剥がした天井板をどこに使おうかと考える。古いものを使わすことでも、設計だけしていた時の違和感が解消されたんです」

それが、会社のコンセプトである「つくれない。つくること」だ。

高岡では、荒物屋だった築二〇年の建物を購入し、事務所兼住居にする予定だったが、自らも荒物屋を始めたことにしたという。

「荒物屋として続いている意味があるのかなと。高岡のすばらしいストックを活かしたい」

オープン時には、大菅さんが「現代の荒物」と考える商品が揃う。また、まちの賑わいを生むイベントを企画するなど、大菅さんによる高岡の「解体設計」が始まっているようだ。

大菅さん、富山県立高岡高校卒業後、東京の美術大学へ進学。設計事務所等の勤務を経て、「studiooosuga」(スタジオオオスガ)を設立。店舗設計・施工で、東京を中心に活動していたが、東日本大震災を機に、高岡に生活拠点を移す。2016年4月9日、荒物屋「大菅商店」をオープン予定。

住所:高岡市大手町12-4
TEL:070-5465-4257

⑦⑧大菅商店に並ぶ商品
かごやほうき等の家庭用雑貨(荒物)を扱う
⑨土蔵造りの店舗の外観

*店舗の写真は、正式オープン前のものです。

